

石川忠久博士追悼特集

特集にあたって

東アジア学術総合研究所長 牧角 悦子

『東アジア学術総合研究所集刊』本号を、石川忠久博士追悼号として発刊することになった経緯を紹介したい。

実は、本研究所と石川先生は、お隣に顧問室を構えていらしたこと、石川先生が顧問を務める二松詩文会の事務助手が東アジア学術総合研究所に机を置いていたことなど、空間的な繋がりが有ったとは言え、直接の繋がりはない。そうでありながら、石川先生は、なぜかずっと研究所の「ご近所さん」でいらした。ご自宅がご近所だっただけでなく、顧問室も隣であり、毎日の日課のようにお部屋に通われ、そのたびに研究所に「やあ！」と顔を出される。研究所の助手も、鍵を開けて差し上げたり、客人を案内して差し上げたりしていた。

そのような中、昨年の七月、石川先生の訃報が届いた。ご体調が優れないことは聞いていたが、コロナ禍の影響も有って、人と人が会うことがあまり推奨されない中で、最期のご様子なども、なかなか情報が無かった。ご葬儀も、内々で執り行われたことを、みな後から知った。

ただ、とは言え、二松学舎の学長・理事長をお務めになった方である。本学として、かたち有る敬意は示すべきではないかと、その方法を模索した。旧邸にある蔵書を寄贈いただけるといふ情報もあり、研究所に石川先生の号を冠した「岳堂文庫」を作って記念して差し上げようという話になったのだが、諸事情により遅滞している。それでも、追悼をかたちにしたという思いの結果が、本記念号の発刊なのである。

論考としては、「二松学舎」の学びに関わる論文を、研究所の主なるメンバーで載せた。また、石川先生の最後の弟子でもある研究所主査の石塚英樹氏が、詳細な年譜と著作目録を作成してくれた。

石川先生の存在は、本学と本学の研究にとって様々な意味で強烈であった。今、我々のできることは、この記念号発行というささやかな追悼でしかないが、投げかけていただいた問題については、今後も止むこと無く考え続けていかなければならない、と思っている。

石川忠久博士略年譜

昭和七年（一九三二）

四月九日

○歳（数え年一歳。以下同じ。）
父義久、母知子の長男として、東京府豊多摩郡代々幡町大字代々木百二十二番地（現・東京都渋谷区代々木二丁目十二番地）に生まれる。

昭和十三年（一九三八）

四月

八月

六歳（七歳）
早蕨幼稚園（代々木）に入園。
父の転勤に伴い、旧満洲国新京市（現・吉林省長春市）に転居（以後、十五年一月から十六年三月の間東京に戻った期間を除き、二十一年まで旧満洲に居住）。

昭和十四年（一九三九）

四月

七歳（八歳）
新京市西広場小学校に入学。

昭和十五年（一九四〇）

一月

二月

八歳（九歳）
東京・代々木に戻り、渋谷区立山谷小学校に転校。
詩一篇が、「紀元二千六百年記念・全満児童文集」に入選。
この頃、外祖父石井伯堂の水墨画を描き画讀を書くのを日課とするのに親しむ。

昭和十六年（一九四一）

四月

九歳（十歳）
再び新京に転居し、西広場小学校（この年より国民学校と改称）に転校。
この頃より昭和十八年頃まで、満洲中央放送局にてラジオ放送に出演。

昭和十九年（一九四四）

五月

十月

十二歳（十三歳）
奉天（現・瀋陽市）に転居。雪見国民学校に転校。
父義久、中国南方に出征。

昭和二十年（一九四五）

十三歳（十四歳）

三月

奉天雪見国民学校を卒業。

四月

奉天第二中学校に入学。

六月

四平街（現・四平市）に転居。四平中学校に転校。

八月

四平街を脱出。朝鮮国境八道溝にて終戦をむかえ、引き返して奉天に向かうも入れず、撫順に落ち着く。中学は自然退学。

九月

撫順炭礦更正事務所に臨時雇となり、坑道トロッコの軌道敷設や、練炭・豆炭の製造等に従事する。

昭和二十一年（一九四六）

十四歳（十五歳）

六月

前年末より、国共内戦に遭う。

七月

臨時雇退職（退職金六百円）。

九月

葫蘆島より乗船し帰国。博多港に上陸。七日、母・弟・妹と共に代々木に帰着し、先に帰国していた父と再会。旧知の服部浩彦氏に主要科目を習い、編入試験に備える。

都立第四中学校第二学年に編入。

昭和二十二年（一九四七）

十五歳（十六歳）

四月

この頃、平野紫陽（彦次郎）先生に漢詩の作詩を習う。祖父に肖り岳堂と号する。

昭和二十三年（一九四八）

十六歳（十七歳）

四月

都立第四新制高等学校（後に都立戸山高等学校と改称）に進学（学制改革に伴い、本来は中学四年に進むところ、高校一年となる）。

昭和二十六年（一九五一）

十九歳（二十歳）

三月

同右を卒業。

四月

東京大学教養学部文科二類に入学。仏中の合併クラスに属する。駒場寮に入寮。

昭和二十八年（一九五三）

二十一歳（二十二歳）

四月

同学文学部中国文学科に進学。

昭和三十年（一九五五）

三月

二十三歳（二十四歳）
同右を卒業（卒業論文「謝靈運謝朓詩研究」）。

四月

同文学部研究生となる。

神奈川県立横浜翠嵐高等学校講師。

昭和三十一年（一九五六）

四月

二十四歳（二十五歳）
東京大学大学院人文科学研究科中国語中国文学専攻修士課程に入学。
倉石武四郎著『中国文学史』（中央公論社刊）の手伝いをする。

昭和三十三年（一九五八）

三月

二十六歳（二十七歳）
同右を修了（修士論文「東晋文学研究」）。

四月

同博士課程に進学。

十月

岡山晏子（本名・富貴代）と結婚。

昭和三十四年（一九五九）

十一月

二十七歳（二十八歳）
長男誕生。

昭和三十六年（一九六一）

四月

二十九歳（三十歳）
明治大学商学部講師。

昭和三十七年（一九六二）

三月

三十歳（三十一歳）
大学院単位取得により満期退学。

九月

都立富士森高等学校講師。

昭和三十八年（一九六三）

三月

三十一歳（三十二歳）
神奈川県立横浜翠嵐高等学校を退職。

昭和三十九年（一九六四）

十月

三十二歳（三十三歳）
次男誕生。

昭和四十年（一九六五）

四月

三十三歳（三十四歳）
NHK教育テレビで通信高校講座・漢文を担当。

東京大学教養学部・千葉大学文学部（後、人文学部と改称）講師。

東京支那学会（現・中国社会文化学会）委員（後に理事と改称）。

六月

昭和四十一年（一九六六）

二月

三十四歳（三十五歳）
宇野精一著『詳説漢文』（向上社刊）の協力者として「詩文」を執筆。

都立富士森高等学校を退職。

三月

桜美林大学の創設に招かれ、文学部中文科助教授に就任。

昭和四十二年（一九六七）

四月

三十五歳（三十六歳）
埼玉大学教養学部・教養部講師。

昭和四十四年（一九六九）

三月

三十七歳（三十八歳）
埼玉大学教養学部を退職。

四月

湯島聖堂にて、婦人教養講座「唐詩の鑑賞」を担当。

明治大学文学部講師（後に大学院も兼ねる）。

十月

NHKテレビ通信高校講座講師。
岩手大学教育学部集中講義。

昭和四十五年（一九七〇）

四月

三十八歳（三十九歳）
社団法人哲泉流日本吟詠協会顧問。

NHKラジオ通信高校講座講師。

十月

大学漢文教育研究会総務委員（昭和五十八年度まで）。

昭和四十六年（一九七一）

一月

三十九歳（四十歳）
愛知教育大学集中講義。

NHKテレビ教養特集「漢詩夜話」放映。

四月 社団法人霞朗詠会特別顧問。
六月 東大中哲文学会委員（時に委員長。東京支那学会を改組した学会。昭和五十五年度まで）。

昭和四十七年（一九七二）

四月

四十歳（四十一歳）
桜美林大学文学部教授に昇任。

九月

霞朗詠会「加壽美会報」（後に「かすみ会報」）に連載を開始。

昭和四十八年（一九七三）

三月

四十一歳（四十二歳）
NHKテレビ通信高校講座終了。

千葉大学文学部を退職。

四月
十二月

学習院大学文学部・大東文化大学文学部・慶應義塾大学文学部講師。
NHKテレビ市民大学講座「漢詩のころ」放映（翌年三月まで）。

昭和四十九年（一九七四）

四月

四十二歳（四十三歳）
東京大学・同大学院・立教大学文学部講師。

十一月

湯島聖堂にて、教養講座「唐詩鑑賞」を担当。
財団法人斯文会評議員。

昭和五十年（一九七五）

三月

四十三歳（四十四歳）
明治大学商学部・大東文化大学文学部を退職。

九月

愛知大学文学部集中講義。

昭和五十一年（一九七六）

十一月

四十四歳（四十五歳）
日本道教学会評議員（昭和六十三年（一九八八）十一月まで）。

昭和五十二年（一九七七）

一月

四十五歳（四十六歳）
NHKテレビ通信高校講座特集「漢詩への誘い」放映。

三月

湯島聖堂「聖社詩会」主宰となる。
立教大学を退職。

四月

日本女子大学文学部講師。

二松詩文会同人。

七月

日中友好協会派遣大学訪中団の一員として、第一回訪中（北京・長沙・韶山・南昌・上海など）。
財団法人斯文会常務理事（平成元年（一九八九）まで）。

十二月

日中友好協会派遣中国研究者訪中団の団長として、第二回訪中（北京・西安・洛陽・上海など）。

昭和五十三年（一九七八）

四十六歳（四十七歳）

四月

桜美林大学中国語中国文学科長に就任。
新潟日報などに毎週一回「漢詩」欄を執筆（四年間）。

昭和五十四年（一九七九）

四十七歳（四十八歳）

一月

日中友好漢詩愛好家訪中団として、第三回訪中（香港・広州・成都・重慶・武漢など）。

四月

大正大学文学部・東京大学文学部講師。

八月

第四回訪中（北京・済南・曲阜・泰安（泰山）・上海など）。

昭和五十五年（一九八〇）

四十八歳（四十九歳）

三月

日本女子大文学部を退職。

四月

第五回訪中（北京・洛陽・西安・上海など）。

日本中国学会専門委員（後に学術専門委員と改称）就任。

昭和五十六年（一九八一）

四十九歳（五十歳）

三月

大正大学文学部を退職。

NHKラジオ通信高校講座終了。

第六回訪中（上海・杭州・南京・無錫・蘇州など）。

四月

明治大学大学院講師。

日本中国学会評議員・理事（理事でない時は監事）。

日本煎茶道連盟『煎茶道』に館柳湾編「詠茶詩録」の注解の連載を開始（毎月、昭和六十二年（一九八七）十一月まで八十回）。

六月

東大中哲文学会理事（委員を改称。昭和五十九年度まで）。

八月

東京法令出版『月刊国語教育』に「漢文教材研究講座」（後に「漢文教育研究講座」に変更）の連載を開始（昭和五十七年（一九八二）九月まで十二回）。

十月

第七回訪中（上海・南昌・景德鎮・廬山・九江・南京・鎮江・揚州など）。

昭和五十七年（一九八二）

五十歳（五十一歳）

二月

文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科会）（昭和五十九年（一九八四）一月まで）。

四月

日本女子大学大学院講師。

文部省高等学校国語科指導要領解説作成協力委員（平成元年（一九八九）三月まで）。

九月

第八回訪中（上海・南京・西安・北京など）。

第九回訪中（上海・無錫（太湖）・杭州・紹興・寧波など）。

昭和五十八年（一九八三）

五十一歳（五十二歳）

三月

学習院大学文学部を退職。

第十回訪中（香港・広州・成都・重慶・三峡・岳陽など）。

二松学舎大学文学部・同大学院講師。

四月

第十一回訪中（北京・包頭・呼和浩特・大同・太原など）。

八月

大学漢文教育研究会委員長（昭和五十九年（一九八四）十月まで）。

十月

この頃、桜美林大学内に「櫻林詩会」を開く。

十一月

大阪大学文学部集中講義。

昭和五十九年（一九八四）

五十二歳（五十三歳）

三月

第十二回訪中（北京・西安・洛陽・上海など）。

明治大学文学部・日本女子大学大学院を退職。

四月 上智大学文学部・同大学院講師。

NHK文化センターにて作詩講座を開き、「青山詩会」と名づける。

第十三回訪中（上海・蘇州・無錫・宜興・杭州・紹興など）。

日野市漢詩連盟より請われ詩会を開く（後、「花水吟社」と名づける）。

第十四回訪中（上海・西安・蘭州・敦煌・トルファン・ウルムチ・北京など）。

大学漢文教育研究会を改組し、全国漢文教育学会を設立、会長に就任。

十二月 文部省学術審議会専門委員（学術用語分科会）（昭和六十一年（一九八六）二月まで）。

「櫻林詩会」、正式発足。

昭和六十年（一九八五）

五十三歳（五十四歳）

三月 第十五回訪中（北京・洛陽・鞏県・鄭州・開封・上海など）。

四月 NHK文化セミナー・ラジオ「漢詩をよむ」放送開始。

六月 東大中国学会理事（東大中哲文学会を改組した学会）。

七月 愛媛大学法文学部集中講義。

八月 第十六回訪中（上海・武漢・岳陽・沙市・巫山・奉節・萬県・石寶寨・重慶・大足など）。

昭和六十一年（一九八六）

五十四歳（五十五歳）

一月 桜美林大学文学部長（二期四年）、桜美林学園評議員に就任。

三月 第十七回訪中（北京・西安・三門峽・洛陽・南京・上海など）。

六月 第十八回訪中（上海・西安・运城・三門峽・洛陽・鄭州・北京など）。

九月 第十九回訪中（香港・桂林・柳州・靈渠・永州・衡陽（衡山）・長沙・広州など）。

十月 実践女子大学大学院講師。

茨城大学人文学部集中講義。

台湾視察。

昭和六十二年（一九八七）

五十五歳（五十六歳）

一月 茨城大学集中講義。

二月 文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科会）（平成元年（一九八九）一月まで）。

三月 明治大学大学院を退職。
 第二十回訪中（上海・南京・蘇州・無錫（太湖）・杭州など）。
 九月 第二十一回訪中（上海・兗州・曲阜・泰安（泰山）・済南・淄博・煙台・青島など）。

昭和六十三年（一九八八）

三月 五十六歳（五十七歳）
 実践女子大学大学院を退職。
 九月 第二十二回訪中（北京・西安・成都・香港など）。
 十月 第二十三回訪中（北京・ウルムチ・カシユガル・イスタンブール・ローマ・ポンペイ・ナポリなど）。
 十一月 名古屋大学文学部集中講義。
 日本道教学会理事。

昭和六十四年・平成元年（一九八九）

三月 五十七歳（五十八歳）
 第二十四回訪中（上海・南京・滁州・馬鞍山・揚州・鎮江・常州・無錫・上海など）。
 八月 文部省大学設置学校法人審議会専門委員（大学設置分科会）（平成六年（一九九四）七月まで）。
 十二月 財団法人斯文会理事長に就任（法人登記上の就任は平成二年（一九九〇）二月）。

平成二年（一九九〇）

一月 五十八歳（五十九歳）
 NHKテレビ「漢詩紀行」を監修。
 三月 桜美林大学を退職。
 四月 第二十五回訪中（上海・寧波・普陀山・天台山・紹興・杭州など）。
 五月 二松学舎大学大学院文学研究科教授・中国学専攻主任に就任。
 桜美林大学名誉教授の称号を授与される。
 八月 『新しい漢文教育』（後に『新しい漢字漢文教育』に誌名変更）に「正陶室詩話」の連載を開始（年二回、平成二十九年（二〇一七）六月まで五十四回）。
 十一月 財団法人斯文会理事長として、湯島聖堂創建三百年記念展覧会「江戸は日本人を創った」を日本橋東急百貨店にて開催。
 十二月 財団法人斯文会理事長として、湯島聖堂創建三百年記念式典を挙行。
 秋田大学教育学部集中講義。

平成三年（一九九二）

五十九歳（六十歳）

三月

第二十六回訪中（香港・昆明・成都・広州など）。

四月

第二十七回訪中（北京・洛陽・西安など）。

六月

財団法人東方学会地区委員（平成十三年三月まで）。

七月

日本学術会議会員（第十五期）に選任。

十二月

茨城大学集中講義。

平成四年（一九九三）

六十歳（六十一歳）

二月

文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科会）（平成六年（一九九四）一月まで）。

三月

東京大学より文学博士の学位を授与される（学位論文「陶淵明研究」）。

十・十一月

NHKテレビ「漢詩紀行」の取材、ロケのため訪中（南京・徐州・沛県）。

平成五年（一九九三）

六十一歳（六十二歳）

四月

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻主任に再任。

五月

中国湖南省長沙市岳麓詩社顧問に就任。

九月

中国旅游（北京・大同・五台山・忻州・太原など）。

十月

山西大学（太原市）にて、江戸時代の漢詩についての学術講演を中国語で行う。

十二月

イギリス旅游。

十二月

東京書道教育会『筆心』に連載を開始（平成二十四年（二〇一二）六月まで）。

十二月

財団法人斯文会第一回文化講演会で講演。

平成六年（一九九四）

六十二歳（六十三歳）

三月

中国旅游（香港・惠州・広州・汕頭・潮州・漳州・廈門・泉州・莆田・福州・上海など）。

四月

湯島聖堂にて、講座「漢詩作法入門」開始（平成十七年（二〇〇五）まで）。

六月

東方学会評議員。

七月

香港・台湾旅游。

七月

日本学術会議会員（第十六期）に再選、語学文学研究連絡委員会委員長（平成十二年（二〇〇〇）七月まで）。

九月

フランス旅游。

平成七年（一九九五）

六十三歳（六十四歳）

三月
四月

台湾政府（教育部）の招聘を受け、中国文化大学などで講演、漢学研究中心などを視察。
日本中国学会理事長に就任（平成九年（一九九七）三月まで）。

二松学舎大学大学院文学研究科長に就任（平成十一年三月まで）。
国際儒学聯合会（本部在北京）副会長に就任。

湯島聖堂にて、講座「江戸の漢詩」開始（平成二十六年（二〇一四）まで）。
中国旅游（陝西省）。

七月
九月

日本学術会議第一部夏季部会（沖縄）に出席。
学校法人二松学舎評議員（平成十七年（二〇〇五）三月まで）。

十月

東京漢字検定協会会長に就任（平成十五年（二〇〇三）まで）。
漢字文化振興会が発足、専務理事に就任（平成二十三年（二〇一一）三月まで）。会長は元日本銀行総裁三重野康氏。

平成八年（一九九六）

六十四歳（六十五歳）

四月

中原伸之氏ら財界人に漢詩を講ずる朝食勉強会を始め、「樂只会」と名づける。

中国旅游（上海・南京・和県・宣城など）。

九月

ベネルクス三国旅游。

十一月

NHKテレビ「長江三峡」に出演。

平成九年（一九九七）

六十五歳（六十六歳）

四月

学校法人二松学舎理事に就任（平成十七年（二〇〇五）三月まで）。

二松学舎大学大学院文学研究科長に再任。

六朝学術学会設立、会長に就任（平成二十一年（二〇〇九）三月まで）。設立大会で記念講演。

中国旅游（寧夏）。

七月

日本学術会議会員（第十七期）に三選、語学文学研究連絡委員会委員長に再選（共に平成十二年七月まで）。

中国江西省廬山にて第一回日中陶淵明学会開催、基調講演を行う。

九月

オーストリア旅游。

十一月 諸橋轍次記念館開館五周年記念文化講演会（新潟）で講演。

平成十年（一九九八）

六十六歳（六十七歳）

一月 文部省高等学校国語科指導要領解説作成協力委員となる（平成十二年一月まで）。

四月 財団法人斯文会理事長として、昌平坂学問所創建二百年・財団法人斯文会創立八十年記念式典を文京区

シビックホールにて挙行、記念講演を行う。

長江三峡舟遊。

七月 中国旅游（青海・甘肅両省）。

十月 今昔文字鏡研究会会長に就任。

平成十一年（一九九九）

六十七歳（六十八歳）

四月 二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻主任に再任。

中国旅游（山東省）。

九月 学校法人二松学舎理事長、同評議員に就任。

中部ヨーロッパ旅游。

十月 文部省科学研究費による「三島中洲の学芸とその生涯」研究会に参加。

平成十二年（二〇〇〇）

六十八歳（六十九歳）

四月 大修館書店『大漢和辞典』完結記念全国縦断講演会の講師として、東京・仙台・新潟・京都・名古屋・福岡・

広島・札幌で講演。

丸善『学鑑』に「岳堂詩話」の連載を開始（毎月、平成十四年（二〇〇二）三月まで二十四回）。

中国旅游（山西省）。

日本学術会議公開シンポジウムでパネリスト。

七月 第二回日中陶淵明学会（江西省廬山）で基調講演を行う。

八月 九江師範専科学校（江西省九江市）陶淵明研究中心客座研究員。

十月 閑谷学校創学三百三十年記念講演会で講演。

平成十三年（二〇〇一）

六十九歳（七十歳）

三月 学校法人二松学舎理事長を退任。

四月 二松学舎大学学長に就任。学校法人二松学舎理事、評議員。

NHKラジオ「漢詩をよむ」が完結（十六年間）。「漢詩への誘い」として再出発。

中国旅游（杭州・金華・上饒・武夷・上海）。

六月 安東省菴没後三百年記念講演会（柳川）で講演。

七月 大東文化大学大学院集中講義。

平成十四年（二〇〇二）

七十歳（七十一歳）

四月 中国旅游。

十月 学校法人二松学舎創立百二十五周年記念式典で学長式辞。

十二月 二松詩文会代表に就任。

台湾視察。

平成十五年（二〇〇三）

七十一歳（七十二歳）

三月 全日本漢詩連盟を設立、初代会長に就任。設立総会で記念講演を行う。

四月 日本中国学会顧問。

五月 佛光大学（台湾宜蘭県）国際学会に出席。

六月 江戸開府四百年記念シンポジウム「漢字文化―江戸に学ぶ」で特別講演。

七月 日本学術会議会員（第十八期）に四選。

九月 二松学舎大学公開講座で講義（平成十八年（二〇〇六）九月まで）。

十二月 尾藤二洲百九十年祭記念講演会（川之江）で講演。

平成十六年（二〇〇四）

七十二歳（七十三歳）

四月 中国旅游（杭州・寧波・余姚・紹興・上海）。

浙江大学で講演。

六月 茨城県漢詩連盟設立総会で講演。

七月 東京新聞神奈川版に「かながわ漢詩紀行」の連載を開始（週一回、平成十八年（二〇〇六）一月まで六十八回）。

八月 成均館大学校（韓国）視察。

平成十七年（二〇〇五）

七十三歳（七十四歳）

三月 二松学舎大学学長を退任。同大学院文学研究科教授を定年退職。

四月 学校法人二松学舎顧問に就任。

二松学舎大学名誉教授の称号を授与される。

湯島聖堂にて、講座「中国名文味読」開始（平成十八年（二〇〇六）まで）。

二松学舎大学二十一世紀COEプログラム公開講座で講義（平成二十一年（二〇〇九）三月まで）。

中国旅游。

七月

修美社『墨の芸術情報誌修美』に「漢詩紀行」の連載を開始（平成二十六年（二〇一四）十二月まで三十回）。

千葉県漢詩連盟設立総会で講演。

九月

二松学舎大学二十一世紀COEプログラム国際シンポジウムで講演。

十二月 東京都漢詩連盟設立総会で講演。

平成十八年（二〇〇六）

七十四歳（七十五歳）

一月

福島民友新聞に「漢字の世界四字熟語」の連載を開始（平成十九年（二〇〇七）三月まで三百六十六回）。

三月

桜美林大学孔子学院開設記念講演会で講演。

四月

湯島聖堂にて、講座「漢詩作法」開始（令和二年（二〇二〇）まで）。

中国旅游。

十月

神奈川県漢詩連盟設立総会で講演。

十二月 北京大学視察。

平成十九年（二〇〇七）

七十五歳（七十六歳）

一月 日本武道館『月刊武道』に「古典に学ぶ」の連載を開始（毎月、平成十九年（二〇〇七）十二月まで十二回）。

三月 中国旅游。

四月

福島民友新聞に「ことばの泉故事熟語」の連載を開始（平成二十年（二〇〇八）三月まで二百九十八回）。

中国旅游。

五月

湯島聖堂にて、講座「中国の名言・成語」開始（令和元年（二〇一九）まで）。

九月

福島市制百周年記念文化講演会で講演。

十一月

岡山県漢詩連盟設立総会で講演。
埼玉県漢詩連盟設立総会で講演。

平成二十年（二〇〇八）

四月

栃木県漢詩連盟設立総会で講演。

六月

中国旅游（鄭州・開封・偃師・鞏義・嵩陽・許昌など）。

九月

伊豆新聞本社創立六十周年記念文化講演会で講演。

十月

戊辰戦争奥羽越列藩同盟結成百四十周年記念歴史シンポジウム（会津若松）で講演。

十一月

金婚旅行（淡島）。
瑞宝中綬章を受章。

平成二十一年（二〇〇九）

四月

七十七歳（七十八歳）
二松学舎大学日本漢文教育研究プログラム公開講座で講義（平成二十四年（二〇一二）三月まで）。

十一月

六朝学術学会顧問。
中国旅游（山東省）。

十一月

第一回諸橋轍次博士記念漢詩大会（三条）で講演。

平成二十二年（二〇一〇）

二月

七十八歳（七十九歳）
ヴェトナム旅游。

四月

中国旅游（山西省）。

六月

公益財団法人斯文会理事長に就任（改組による）。

十月

長野県漢詩連盟設立総会で講演。

十一月

二松学舎大学「論語」の学校 RONGO ACADEMIA で素読実践を担当（二〇一九年度まで）。

十二月

柴野栗山二百四年祭（高松）で講演。

平成二十三年(二〇一三)

七十九歳(八十歳)

一月 日本弘道会『弘道』に「漢詩の味わい」の連載を開始(平成二十五年(二〇一三)三月まで十二回)。

四月 漢字文化振興会の発展的解消に伴い、漢字文化振興協会を設立、会長に就任。

中国旅游(江蘇省)。

九月 近畿漢詩連盟設立総会(大阪)で講演。

十月 宮城県漢詩連盟設立記念漢詩講演会で講演。

平成二十四年(二〇一四)

八十歳(八十一歳)

四月 中国旅游(雲南省)。

八月 中国旅游(東北三省)。

十一月 第一回二松学舎大学学術文化講演会で講演。

平成二十五年(二〇一五)

八十一歳(八十二歳)

三月 全日本漢詩連盟設立十周年記念大会で講演。

四月 二松学舎大学二号館二階に顧問室設置、「哲中庵」と名づける。

十月 日本中国学会第六十五回大会(秋田大学)で特別講演。

十二月 尾藤二洲没後二百年祭典(川之江)で講演。

平成二十六年(二〇一六)

八十二歳(八十三歳)

一月 第一回桜美林大学孔子学院漢詩朗読・創作発表大会で講演。

三月 神奈川県真鶴町お林展望公園内に「真鶴海岸書懷」詩碑が建立される。

中国旅游(西安)。

九月 第三回二松学舎大学学術文化講演会(仙台)で講演。

十月 第二十回二松学舎大学教育研究大会で講演。

平成二十七年(二〇一七)

八十三歳(八十四歳)

一月 顧問室を新設の二松学舎大学四号館九階に移設。

五月 湯島聖堂にて、講座「日本の漢詩」開始(令和元年(二〇一九)まで)。

九月 千葉県漢詩連盟十周年記念大会で講演。
十二月 世界文化遺産登録記念歴史フォーラム（葦山）で講演。

平成二十八年（二〇一六）

八十四歳（八十五歳）

六月 東京都漢詩連盟設立十周年記念総会で講演。
七月 二松学舎大学全国学生・生徒漢詩コンクール特別企画・漢詩講演会で講演。
十月 二松学舎大学文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢字」公開講座で「幕末・明治の漢詩」を担当（平成三十一年（二〇一九）二月まで）。
十二月 神奈川県漢詩連盟創立十周年記念式典で記念講演。
威宜園開塾二百年プレイベント講演会（日田）で講演。

平成二十九年（二〇一七）

八十五歳（八十六歳）

三月 神奈川県漢詩連盟創立十周年記念漢詩大会で記念講演。
七月 二松学舎大学漢学者記念館会議に出席、閉会挨拶。
十二月 東海地区（遠江・駿河・三河）漢詩連盟発足式（浜松）で記念講演。
全国ふるさと漢詩コンテスト二十周年記念公開講座（多久）で講義。

平成三十年（二〇一八）

八十六歳（八十七歳）

九月 全日本漢詩連盟設立十五周年記念大会で講演。

平成三十一年・令和元年（二〇一九）

八十七歳（八十八歳）

三月 新元号の考案を政府から正式に委嘱される。
五月 公益財団法人斯文会理事長として創設百周年記念式典を挙行。
十月 公益財団法人斯文会名誉副会長。
十一月 一般社団法人漢字文化振興協会名誉会長。
公益財団法人斯文会主催米寿祝賀会出席。

令和二年（二〇二〇）

八十八歳（八十九歳）

一月 桜美林大学孔子学院第七回漢詩朗読・創作発表大会で講演。
十月 第三十五回国民文化祭みやぎ二〇二〇さきがけプログラム全国漢詩の祭典で記念講演。

令和三年（二〇二一）

八九歳（九〇歳）

九月 全日本漢詩大会石川大会で記念講演。

令和四年（二〇二二）

九〇歳（九一歳）

七月十二日 逝去。

作成にあたっては、『桜美林大学中国文学論叢第十七号石川忠久教授桂冠記念号』（桜美林学園・一九九二年三月）所収「石川忠久教授略年譜」、『石川忠久華甲記念漢詩選集 長安好日わが漢詩の日々』（東方書店・一九九二年四月）所収「石川忠久略年譜」、『石川忠久古稀記念漢詩選集 桃源佳境わが詩わが旅』（東方書店・二〇〇一年四月）所収「石川忠久略年譜」、『石川忠久先生星寿記念論文集 菊を採る東籬の下』（汲古書院・二〇二二年十月）所収「石川忠久先生略年譜・同主要著作」、公益財団法人斯文会提供の資料等を参考とした。

作成 東アジア学術総合研究所主査 石塚 英樹

石川忠久博士主要著作目録

- 『近代中国の思想と文学』（共著）昭和四十二年（一九六七）七月 大安
 『文学概論』（中国文化叢書 第四卷）（共著）昭和四十二年（一九六七）九月 大修館書店
 『世界の詩』「中国」昭和四十三年（一九六八）六月 さ・え・ら書房
 『資通通鑑選』（中国古典文学大系 第二四卷）（共編）昭和四十五年（一九七〇）八月 平凡社
 『陸游詩集』（中国の詩集カラー版 九）昭和四十八年（一九七三）角川書店
 『漢文』（高等学校国語科教育研究講座 第一一巻）（共著）昭和四十九年（一九七四）十月 有精堂出版
 『漢詩の世界 そのころと味わい』昭和五十年（一九七五）大修館書店
 『中国文学史』（共著）昭和五十年（一九七五）六月 東京大学出版会
 『漢詩の風景 ことばとところ』昭和五十一年（一九七六）六月 大修館書店
 『漢詩の解釈と鑑賞事典』（共著）昭和五十四年（一九七九）三月 旺文社
 『漢詩のころ』昭和五十五年（一九八〇）十二月 時事通信社
 『中国の古典文学 作品選読』（共著）昭和五十六年（一九八一）四月 東京大学出版会
 『長安の春秋』（人物中国の歴史 六）昭和五十六年（一九八一）八月 集英社
 『中国文学の女性像』（編著）昭和五十七年（一九八二）三月 汲古書院
 『漢詩の楽しみ』昭和五十七年（一九八二）十二月 時事通信社
 『詩経』（中国古典新書）昭和五十九年（一九八四）四月 明徳出版社
 『隠逸と田園』（中国古典詩聚花 二）昭和五十九年（一九八四）九月 尚学図書
 『NHK文化講演会』一一（共著）昭和五十九年（一九八四）十二月 日本放送出版協会
 『要解漢和新辞典』（共編著）昭和六十年（一九八五）三月 清水書院
 『要解国語新辞典』（共編著）昭和六十年（一九八五）三月 清水書院
 『玉台新詠』（中国の古典 二五）昭和六十一年（一九八六）二月 学習研究社
 『中国文学概論』（中国文化全書 四）（共著）昭和六十一年（一九八六）三月 高文堂出版社
 『『大漢和辞典』を読む』（共著）昭和六十一年（一九八六）三月 大修館書店
 『漢詩への招待』昭和六十二年（一九八七）五月 新樹社
 『受験ベスト・漢文』昭和六十二年（一九八七）六月 学習研究社
 『中国古詩名篇鑑賞辞典』（共編）昭和六十二年（一九八七）八月 江蘇古籍出版社
 『南京物語 江南佳麗の地』（中国の都城 七）昭和六十二年（一九八七）十一月 集英社
 『韻偶大成』上（編校）昭和六十二年（一九八七）十二月 松雲堂書店

- 〔韻偶大成〕 下(編校) 昭和六十二年(一九八七)十二月 松雲堂書店
- 〔韻偶大成〕 姓氏録(編) 昭和六十二年(一九八七)十二月 松雲堂書店
- 〔漢詩の世界 そのこころと味わい〕 新装版 平成元年(一九八九)五月 大修館書店
- 〔漢詩の風景 ことばとこころ〕 新装版 平成元年(一九八九)年五月 大修館書店
- 〔からうたもよう 漢詩百詠〕(監修) 平成元年(一九八九)十月 大修館書店
- 〔漢詩日記〕 平成元年(一九八九)十一月 大修館書店
- 〔唐詩選〕 平成元年(一九八九)十一月 東方書店
- 〔福武漢和辞典(共編) 平成二年(一九九〇)十一月 福武書店
- 〔中国からやってきた 故事・名言(くもんのまんがおもしろ大事典) 監修〕 平成三年(一九九二)三月 くもん出版
- 〔中国の文人「竹林の七賢」とその時代(共訳) 平成三年(一九九二)十一月 大修館書店
- 〔NHK漢詩紀行〕 一 平成三年(一九九二)十二月 日本放送出版協会
- 〔長安好日 わが漢詩の日々 石川忠久華甲記念漢詩選集〕 平成四年(一九九二)四月 東方書店
- 〔古詩(中国の名詩鑑賞 三) 平成五年(一九九三)六月 明治書院
- 〔NHK漢詩紀行〕 二 平成五年(一九九三)六月 日本放送出版協会
- 〔漢詩の魅力〕 平成五年(一九九三)十月 時事通信社
- 〔陶淵明とその時代〕 平成六年(一九九四)四月 研文出版
- 〔NHK漢詩紀行〕 三 平成六年(一九九四)七月 日本放送出版協会
- 〔福武漢和辞典〕 新装版(共編) 平成六年(一九九四)十月 ベネッセコーポレーション
- 〔漢詩の世界 絵巻(監修・解説) 平成六年(一九九四)十月 エンドウ企画
- 〔神農五千年(分担執筆・監修) 平成七年(一九九五)三月 斯文会
- 〔NHK漢詩紀行〕 四 平成七年(一九九五)四月 日本放送出版協会
- 〔漢詩・漢文解釈講座〕 一八巻・別巻・総目次(監修代表) 平成七年(一九九五)四月 昌平社
- 〔漢詩〕の心 自然を謳い人生を詠む(共著) 平成七年(一九九五)六月 プレジデント社
- 〔漢詩をよむ 春の詩一〇〇選〕(NHKライブラリー 二五) 平成八年(一九九六)三月 日本放送出版協会
- 〔NHK漢詩紀行〕 五 平成八年(一九九六)四月 日本放送出版協会
- 〔漢詩をよむ 夏の詩一〇〇選〕(NHKライブラリー 三七) 平成八年(一九九六)六月 日本放送出版協会
- 〔漢詩をよむ 秋の詩一〇〇選〕(NHKライブラリー 三八) 平成八年(一九九六)九月 日本放送出版協会
- 〔漢詩をよむ 冬の詩一〇〇選〕(NHKライブラリー 四九) 平成八年(一九九六)十二月 日本放送出版協会
- 〔NHK漢詩をよむ 李白〕CD 平成八年(一九九六)十二月 NHKサービスマスター
- 〔書香の家 宇野精一博士米寿記念対談集(対談) 平成九年(一九九七)四月 明治書院

- 『名詩の故里』NHK漢詩をよむ 第一集 華北（監修・著）平成九年（一九九七）五月 日本放送出版協会
- 『名詩の故里』NHK漢詩をよむ 第二集 江南（監修・著）平成九年（一九九七）五月 日本放送出版協会
- 『名詩の故里』NHK漢詩をよむ 第三集 江湖（監修・著）平成九年（一九九七）五月 日本放送出版協会
- 『漢字とコンピュータ』（共著）平成九年（一九九七）六月 大修館書店
- 『詩経』上（新釈漢文大系 一一〇）平成九年（一九九七）九月 明治書院
- 『漢詩を作る』（あじあブックス 一）平成十年（一九九八）六月 大修館書店
- 『詩経』中（新釈漢文大系 一一一）平成十年（一九九八）十二月 明治書院
- 『漢詩をよむ』李白一〇〇選（NHKライブラリー 九三）平成十年（一九九八）十二月 日本放送出版協会
- 『漢詩をよむ』杜甫一〇〇選（NHKライブラリー 九四）平成十年（一九九八）十二月 日本放送出版協会
- 『詩経』下（新釈漢文大系 一一二）平成十二年（二〇〇〇）七月 明治書院
- 『漢詩をよむ』蘇東坡一〇〇選（NHKライブラリー 一二八）平成十三年（二〇〇一）一月 日本放送出版協会
- 『漢詩をよむ』白楽天一〇〇選（NHKライブラリー 一二九）平成十三年（二〇〇一）一月 日本放送出版協会
- 『桃源佳境 わが詩わが旅 石川忠久古稀記念漢詩選集』平成十三年（二〇〇一）四月 東方書店
- 『唐詩選のことば』（My古典）平成十四年（二〇〇二）一月 斯文会
- 『石川忠久漢詩の講義』平成十四年（二〇〇二）四月 大修館書店
- 『詩経』（新書漢文大系 一五）平成十四年（二〇〇二）七月 明治書院
- 『日本人の漢詩 風雅の過去へ』平成十五年（二〇〇三）二月 大修館書店
- 『朗読で味わう漢詩』（プレイブックスインテリジェンス）平成十五年（二〇〇三）六月 青春出版社
- 『石川忠久中西進の漢詩歓談』（共著）平成十六年（二〇〇四）五月 大修館書店
- 『石川忠久の漢詩紀行一〇〇選』DVD・BOX 全一〇巻（監修）平成十六年（二〇〇四）九月 NHKエンタープライズ
- 『漢詩をよむ』杜牧一〇〇選（NHKライブラリー 一八八）平成十六年（二〇〇四）十月 日本放送出版協会
- 『歴史に未来を観る 陳舜臣対談集』（述）平成十六年（二〇〇四）十一月 集英社
- 『中華旅吟』平成十六年（二〇〇四）十一月 中国青年出版社
- 『漢詩をよむ』陸游一〇〇選（NHKライブラリー 一九〇）平成十六年（二〇〇四）十二月 日本放送出版協会
- 『岳堂詩の旅』（石川忠久著作選 四）平成十七年（二〇〇五）四月 研文出版
- 『漢詩への招待』（文春文庫）平成十七年（二〇〇五）十月 文藝春秋
- 『長安の春秋 中国文学論考』（石川忠久著作選 二）平成十七年（二〇〇五）十月 研文出版
- 『新漢詩の世界』平成十八年（二〇〇六）四月 大修館書店
- 『新漢詩の風景』平成十八年（二〇〇六）四月 大修館書店
- 『漢詩の魅力』（ちくま学芸文庫）平成十八年（二〇〇六）九月 筑摩書房

- 〔書いて鑑賞する漢詩 李白〕(共著) 平成十九年(二〇〇七)二月 日本放送出版協会
- 〔漢詩をよむ 王維一〇〇選〕(NHKライブラリー 二二二) 平成十九年(二〇〇七)五月 日本放送出版協会
- 〔漢詩をよむ 陶淵明詩選〕(NHKライブラリー 二二三) 平成十九年(二〇〇七)六月 日本放送出版協会
- 〔悠久の古都を巡る〕(ビジュアル漢詩心の旅 一) (監修) 平成十九年(二〇〇七)六月 世界文化社
- 〔長江を詠う〕(ビジュアル漢詩心の旅 二) (監修) 平成十九年(二〇〇七)七月 世界文化社
- 〔大黄河の旅〕(ビジュアル漢詩心の旅 三) (監修) 平成十九年(二〇〇七)八月 世界文化社
- 〔聖なる名山〕(ビジュアル漢詩心の旅 四) (監修) 平成十九年(二〇〇七)九月 世界文化社
- 〔遙かなる大地〕(ビジュアル漢詩心の旅 五) (監修) 平成十九年(二〇〇七)十月 世界文化社
- 〔三島中洲詩全釈〕第一卷(編) 平成十九年(二〇〇七)十月 二松学舎
- 〔東海の風雅 日本漢詩の心〕(石川忠久著作選 三) 平成十九年(二〇〇七)十一月 研文出版
- 〔身近な四字熟語辞典〕(文春文庫) 平成十九年(二〇〇七)十一月 文藝春秋
- 〔能狂言が見たくなる講座十撰〕(共著) 平成二十年(二〇〇八)十月 檜書店
- 〔楽しく使える故事熟語〕(文春文庫) (監修) 平成二十一年(二〇〇九)二月 文藝春秋
- 〔漢詩鑑賞事典〕(講談社学術文庫) 平成二十一年(二〇〇九)三月 講談社
- 〔NHK新漢詩紀行 友愛深厚篇〕(監修) 平成二十一年(二〇〇九)四月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行 山河悠久篇〕(監修) 平成二十一年(二〇〇九)六月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行 人生有情篇〕(監修) 平成二十一年(二〇〇九)八月 日本放送出版協会
- 〔漢魏六朝の詩〕上 平成二十一年(二〇〇九)十一月 明治書院
- 〔漢魏六朝の詩〕下 平成二十一年(二〇〇九)十一月 明治書院
- 〔書で味わう漢詩の世界 絶句名作選〕(共著) 平成二十一年(二〇〇九)十一月 二玄社
- 〔漢詩人大正天皇 その風雅の心〕 平成二十一年(二〇〇九)十二月 大修館書店
- 〔中国語朗読&日本語朗読 漢詩〕上(上古・唐・李白) (ペン読) (監修) 平成二十一年(二〇〇九)十二月 アプライ
- 〔三島中洲詩全釈〕第二卷(編) 平成二十二年(二〇一〇)三月 二松学舎
- 〔NHK新漢詩紀行〕DVD-BOX 全一〇巻(監修) 平成二十二年(二〇一〇)四月 ケンメディア
- 〔NHK新漢詩紀行ガイド〕一(教養・文化シリーズ) (監修) 平成二十二年(二〇一〇)四月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行ガイド〕二(教養・文化シリーズ) (監修) 平成二十二年(二〇一〇)五月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行ガイド〕三(教養・文化シリーズ) (監修) 平成二十二年(二〇一〇)六月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行ガイド〕四(教養・文化シリーズ) (監修) 平成二十二年(二〇一〇)七月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行ガイド〕五(教養・文化シリーズ) (監修) 平成二十二年(二〇一〇)八月 日本放送出版協会
- 〔NHK新漢詩紀行ガイド〕六(教養・文化シリーズ) (監修) 平成二十二年(二〇一〇)九月 日本放送出版協会

- 『中国語朗読&日本語朗読 漢詩』下(唐・杜甫)近現代(ペン読)(監修) 平成二十二年(二〇一〇)十一月 アプライ
 『漢詩と人生』(文春新書) 平成二十二年(二〇一〇)十二月 文藝春秋
 『聞いて楽しむ漢詩一〇〇選 CDブック NHK新漢詩紀行』平成二十三年(二〇一一)一月 日本放送出版協会
 『詩経』新装版(中国古典新書) 平成二十三年(二〇一一)一月 明德出版社
 『茶をうたう詩』『詠茶詩録』詳解 平成二十三年(二〇一一)六月 研文出版
 『新井白石』陶情詩集の研究(共著) 平成二十四年(二〇一二)二月 汲古書院
 『江都晴景 わが心の詩 石川忠久八秩記念漢詩選集』平成二十四年(二〇一二)四月 研文出版
 『湯島聖堂漢文検定藩校編テキスト』(総監修) 平成二十四年(二〇一二)十月 湯島聖堂漢文検定委員会
 『湯島聖堂漢文(論語・漢詩) 検定寺子屋編テキスト』第二版(総監修) 平成二十四年(二〇一二)十月 湯島聖堂漢文検定
 編集委員会
 『漢詩かるた』(監修) 平成二十四年(二〇一二)十一月 佐賀県漢詩連盟
 『漢詩実作必携 平仄字典』新版(補) 平成二十五年(二〇一三)一月 明治書院
 『扶桑の山川 日本の風雅』(石川忠久著作選 五) 平成二十五年(二〇一三)四月 研文出版
 『入門漢詩の世界』(洋泉社MOOK)(第一部監修) 平成二十五年(二〇一三)六月 洋泉社
 『陶淵明とその時代』増補版 平成二十六年(二〇一四)五月 研文出版
 『大正天皇漢詩集』平成二十六年(二〇一四)六月 大修館書店
 『三島中洲詩全集』第三卷(編) 平成二十七年(二〇一五)六月 二松学舎
 『石川忠久漢詩の稽古』平成二十七年(二〇一五)七月 大修館書店
 『湯島聖堂漢文(論語・漢詩) 検定寺子屋編テキスト』第三版(総監修) 平成二十八年(二〇一六)三月 湯島聖堂漢文検定
 委員会
 『三島中洲詩全集』第四卷(編) 平成二十八年(二〇一六)七月 二松学舎
 『歩こう神奈川、漢詩八十景 神奈川漢詩紀行』(神漢連叢書)(監修) 平成二十八年(二〇一六)九月 神奈川県漢詩連盟
 『湯島聖堂漢文検定藩校編論語テキスト』(総監修) 平成二十九年(二〇一七)一月 湯島聖堂漢文検定委員会
 『三島中洲詩全集』第五卷(編) 平成三十一年(二〇一九)四月 二松学舎
 『埋もれた詩傑河野鉄兜 その洒落た風趣 石川忠久講話集』(述) 令和元年(二〇一九)九月 神戸新聞総合出版センター
 『新元号令和慶祝詩集』(監修) 令和元年(二〇一九)十二月 二松学舎大学・二松詩文会・斯文会聖社詩会・全日本漢詩連盟
 『大沼枕山』『歴代詠史百律』の研究(共著) 令和二年(二〇二〇)二月 汲古書院
 『漢詩創作のための詩語集』(監修) 令和四年(二〇二二)八月 大修館書店

NHKテキスト 日本放送出版協会

「NHK漢詩をよむ」

自然のうた・情愛のうた・旅のうた 昭和六十年（一九八五）四月
風雅のうた・戦いのうた・人生のうた 昭和六十年（一九八五）十月
山水のうた・美人のうた・友情のうた 昭和六十一年（一九八六）四月
諷刺のうた・懐古のうた・酒のうた 昭和六十一年（一九八六）十月
閑適のうた・女流のうた・茶のうた 昭和六十二年（一九八七）四月
感傷のうた・花鳥のうた・別離のうた 昭和六十二年（一九八七）十月
李白 昭和六十三年（一九八八）四月
杜甫 昭和六十三年（一九八八）十月
白楽天 平成元年（一九八九）四月
陶淵明 平成元年（一九八九）十月

「NHK文化セミナー漢詩をよむ」

王維 平成二年（一九九〇）四月
蘇東坡 平成二年（一九九〇）十月
杜牧 平成三年（一九九一）四月
陸游 平成三年（一九九一）十月
四季の詩 春から秋へ 平成四年（一九九二）年四月
四季の詩 秋から春へ 平成四年（一九九二）年十月
自然と人生（春） 平成五年（一九九三）年四月
自然と人生（秋） 平成五年（一九九三）年十月
風土と人々（江南の巻） 平成六年（一九九四）年四月
風土と人々（華北の巻） 平成六年（一九九四）年十月
風土と人々（江湖の巻） 平成七年（一九九五）年四月
風土と人々（嶺南の巻） 平成七年（一九九五）年十月
詩人と風景（春花の巻） 平成八年（一九九六）年四月
詩人と風景（秋月の巻） 平成八年（一九九六）年十月
詩人と風景（田園の巻） 平成九年（一九九七）年四月
詩人と風景（都城の巻） 平成九年（一九九七）年十月

詩人と風景 (山水の卷)	平成十年 (一九九八) 年四月
詩人と風景 (旅遊の卷)	平成十年 (一九九八) 年十月
詩と人生 (青雲の卷)	平成十一年 (一九九九) 年四月
詩と人生 (閑適の卷)	平成十一年 (一九九九) 年十月
詩人と行旅 (春山の卷)	平成十二年 (二〇〇〇) 年四月
詩人と行旅 (秋水の卷)	平成十二年 (二〇〇〇) 年十月
NHKカルチャーアワー 「漢詩への誘い」	
季節を詠う (清明の卷)	平成十三年 (二〇〇一) 年四月
季節を詠う (寒露の卷)	平成十三年 (二〇〇一) 年十月
人生を詠う (行遊の卷)	平成十四年 (二〇〇二) 年四月
人生を詠う (閑吟の卷)	平成十四年 (二〇〇二) 年十月
歴史と風土 (長安の卷)	平成十五年 (二〇〇三) 年四月
歴史と風土 (金陵の卷)	平成十五年 (二〇〇三) 年十月
歴史と風土 (成都の卷)	平成十六年 (二〇〇四) 年四月
歴史と風土 (杭州の卷)	平成十六年 (二〇〇四) 年十月
季節を詠う (清明の卷)	平成十七年 (二〇〇五) 年四月
季節を詠う (寒露の卷)	平成十七年 (二〇〇五) 年十月
人生を詠う (行遊の卷)	平成十八年 (二〇〇六) 年四月
人生を詠う (閑吟の卷)	平成十八年 (二〇〇六) 年十月